

自然 = 文化相対主義に向けて

——イヌイトの先住民運動からみるグローバリゼーションの未来——

大村 敬一*

本稿では、極北の先住民であるカナダ・イヌイトの側からグローバリゼーションを考えることを通して、グローバリゼーションという歴史的現象の特質を明らかにし、その現象の中で人類学が果たすべき役割を考察する。そのために、本稿ではまず、ラトゥールが「近代」の問題を検討することで示したグローバルな環境の現状分析に基づいて、イヌイトが直面しているグローバルな環境の現状を整理する。そのうえで、イヌイトが闘ってきた先住民運動をグローバリゼーションという歴史的現象の中に位置づけることによって、その運動を通してイヌイトがグローバルな環境に対して何を守ろうとしているのかを明らかにする。そして、そのイヌイトの闘いを考察することによって、グローバリゼーションと呼ばれる歴史的現象によって引き起こされている問題の根底には、「文化」と「自然」に分離することのできない人間と非人間（モノ）の複合体を構築して維持する異なるシステムの相克があることを明らかにする。そのうえで、今日、求められているのは、「一つの自然」を基盤とする「文化相対主義」ではなく、多様な人間と非人間の複合体の間の「自然 = 文化相対主義」であり、真に共生すべきなのは「一つの自然」の上に築かれる様々な「文化」ではなく、多様なあり方で構築される人間と非人間の様々な複合体であることを示す。最後に、この「自然 = 文化相対主義」において人類学が果たす役割について考える。

キーワード：カナダ・イヌイト，国民国家 = 市場 = テクノサイエンス・ネットワーク，ハイブリッド・モンスター，生業，オートポイエシス，自然 = 文化相対主義

目次

- | | |
|---|---|
| I はじめに：イヌイトの自信という出発点 | に広がるハイブリッド・モンスター |
| II 今日のグローバリゼーションの特質：地球を制圧するハイブリッド・モンスター | III イヌイトは何を守ろうとしているのか？：イヌイトの先住民運動の意味 |
| 1 問い：今日のイヌイトにとっての「グローバルな環境」とは何か？ | 1 ハイブリッド・モンスターへのイヌイトの対応 |
| 2 グローバルな環境の内実：国民国家 = 市場 = テクノサイエンス・ネットワーク | 2 「大地」との絆：イヌイトの自信を支えるオートポイエシスな人間と非人間のネットワーク |
| 3 国民国家 = 市場 = テクノサイエンス・ネットワークの特質 | IV 「自然 = 文化相対主義」に向けて：人類学の役割とその可能性 |
| 4 グローバリゼーションの真実：地球規模 | |

* 大阪大学

I はじめに：イヌイトの自信という出発点

「イヌイトの文化は過酷な極北の環境で栄えてきたし、これからもグローバルな環境のもとで成長し、栄えてゆくことだろう。その中で変わらずに残ってゆくもの、過去と現在と未来を繋ぐものは、コミュニティとの一体感、互いにすすんでどこまでも助け合う精神、進取の気概と機知に富むこと、要するにイヌイトであること、つまり人間であることである。」(ヌナヴト準州政府の官僚のことば) [GN 1999: 1]

「イヌイトを支配する者は誰もいないようだ。……しようと思えば、イヌイトは〈白人〉(Qallunaat) よりはるかに沢山のことができる。なのに、〈白人〉が支配しているのさ。朝、〈白人〉は起きると、すぐまたデスクに向かう。彼が手にもつのはペンか鉛筆だけ。だから、〈白人〉はイヌイトを支配しようなんてしちゃいけないのさ。イヌイトなら、どんなに哀れで非力なイヌイトでも、寒い野外で過ごし、動物を獲って生き抜くことができる。カリブーを狩ったり、魚を獲ったり、キツネを獲ったりしてね。しかも、イヌイトなら、どんな哀れなイヌイトでも、ブリザードのときだって、屋外で過ごすことができる。でもな、〈白人〉は、どんなにでかくて力があるかと、ブリザードの中ですぐに凍えちゃうのさ。」(イヌイトのハンターのことば) [BRODY 1976: 219]

こうしたカナダ・イヌイトの自信はどこからやってくるのだろうか。

カナダ極北圏の先住民であるイヌイトが産業資本主義経済のグローバルなネットワークに取り込まれてすでに一世紀以上が経ち、カナダという近代国民国家の体制に組み込まれ、カナダ連邦政府が定めた行政村落に定住化するようになって半世紀が過ぎようとしている。

すでに、獲物を追って季節周期的な移動生活を営んでいた時代は、古老の記憶を通して語ら

れる過去の物語である。スノーモービルや高性能ライフルで、狩猟と漁労と毘猟を基幹とする生業活動は高度に機械化され、セントラルヒーティングで暖められた家屋には、冷凍庫や冷蔵庫、洗濯機や乾燥機をはじめ、パソコンやケーブル・テレビ、DVDなどの電化製品が溢れている。それぞれの行政村落に設けられた発電所は二十四時間稼働し、航空機や砕氷貨物船の定期便で、ハンバーガーやピザ、チップス、清涼飲料などの加工食品をはじめ、「南」で生産された物品が運び込まれ、スーパーマーケットでいつでも購入することができる。子どもたちは日本のアニメに夢中になり、若者たちはインターネットでの通信販売に狂奔する。多くのハンターは政府のオフィスや工事現場などでの賃金労働を兼業し、カナダ政府からの福祉金や交付金、公共事業に依存しており、ニュースで報じられるカナダの政治・経済、さらにはグローバルな政治・経済の動向に一喜一憂する。

こうした生活を送っているイヌイトが産業資本主義経済のグローバル・ネットワークに組み込まれていることに疑う余地はない。しかも、イヌイト社会はそうしたネットワークの末端であって中心ではなく、遠く離れた中心の動向からの影響を甘受する他にない。たしかに、1970年代からのカナダ連邦政府との政治交渉の果実として、事実上の民族自治が実現されたヌナヴト準州(Nunavut Territory)を1999年に手にしたとはいえ、世界経済の景気が悪化してカナダ連邦政府の経済状態が悪化すれば、福祉金や交付金は削られ、官公庁のリストラや公共事業の縮減によっていつ職を失うかわからない。かつて、イヌイトの与り知らない欧米の企業のタテゴトアザラシの乱獲に端を発したアザラシの毛皮の不買運動に促され、ヨーロッパ共同体が1983年にアザラシの毛皮の輸入を禁止したことによって、重要な現金収入源の一つであったアザラシの毛皮の輸出が大打撃を受けたように、イヌイト社会の命運は世界経済の動向と国民国家の政策によって左右される状況にある。イヌ

イト社会はグローバルな産業資本主義経済と国民国家に間違いなく従属しているのである。

しかし、そうであるにもかかわらず、冒頭に示したイヌイトのことばにあるように、イヌイトは自信に溢れている。もちろん、彼らが自らの従属的な立場に無自覚なわけではない。そもそも、冒頭のことばで「過酷な極北の環境」と「グローバルな環境」が並列されていることからわかる通り、この自信に溢れたことばの前提には、ちょうど過酷な極北の環境に対して支配的な立場に立つことが決してできないように、グローバルな環境も過酷であり、その環境に対しても支配的な立場に立つことができないという認識がある。その過酷な環境のただ中で、その環境に対して従属的な立場に甘んじながらも、自らが「これからも成長し、栄えてゆくことだろう」と言い切る自信は、いったいどこからくるのだろうか。しかも、グローバルな環境に呑み込まれてしまうのではなく、コミュニティとの一体感を維持しながら「イヌイト」でありつづける、さらには、そのイヌイトであることこそ「人間」であることだとまで言い切ってしまう自信は、どこからくるのだろうか。

本稿の目的は、グローバリゼーションの波に曝されてなおイヌイトがこうした確固とした自信をもちうる理由を考えることを通して、グローバリゼーションという歴史的現象の特質を明らかにし、その現象の中で人類学が果たすべき役割を考えることである。

そのために、本稿ではまず、ラトゥールが「近代」の問題を検討することで示したグローバルな環境の現状分析に基づいて、イヌイトが直面しているグローバルな環境を整理する。そのうえで、イヌイトが闘ってきた先住民運動をグローバリゼーションという歴史的現象の中に位置づけることによって、その運動を通してイヌイトがグローバルな環境に対する自信の礎として何を守ろうとしているのかを明らかにする。そして、そのイヌイトの闘いを考察することによって、グローバリゼーションと呼ばれる

歴史的現象によって引き起こされている問題の根底には、文化¹⁾と自然に分離することのできない人間と非人間(モノ)の複合体を構築して維持する異なるシステムの相克があることを明らかにする。そのうえで、今日、求められているのは、「一つの自然」を基盤とする「文化相対主義」ではなく、多様な人間と非人間の複合体の間の「自然=文化相対主義」であり、真に共生すべきなのは「一つの自然」の上に築かれる様々な「文化」ではなく、多様なあり方で構築される人間と非人間の様々な複合体であることを示す。最後に、この「自然=文化相対主義」において人類学が果たす役割について考える。

II 今日のグローバリゼーションの特質： 地球を制圧するハイブリッド・モンスター

1 問い：今日のイヌイトにとっての「グローバルな環境」とは何か？

ここでは、まず、イヌイトが先住民運動を通してグローバルな環境に対する自信の礎として何を守ろうとしているのかについて検討するに先立って、そのグローバルな環境とは何かについて整理しておく。「グローバルな環境」というだけでは、ただ全地球的な規模の環境と言っているだけで、その環境の何が問題なのかははっきりしないからである。

そもそも、現在のイヌイトは1000年ほど前にアラスカからカナダとグリーンランドに進出し、4000年前からカナダ極北圏で暮らしていたパレオ・エスキモーの人々に取って代わったネオ・エスキモーの子孫であり〔岸上 1998；MAXWELL 1985；WENZEL 1991〕、ホモ・サピエンスの出アフリカに端を発する人類のグローバリゼーションという歴史的出来事的一幕を担ったという意味で、考古学的に検証可能な当初よりグローバルな環境を生きてきたと言うことができる。また、今から500年前には、グローバルな規模での気候変動である小氷期に直面し、急激な文化の変化を経験している〔McGHEE

1978; WENZEL 1991]。この意味で、かつてイヌイトの文化が栄えた極北の環境もグローバルな環境の一部であり、これからイヌイトが栄えてゆくと言われるグローバルな環境とかつてのグローバルな環境の違いが明瞭になっていなければ、ことさらに「これからもグローバルな環境のもとで成長し、栄えてゆくことだろう」と言う意味はない。

それでは、イヌイトがこれからも生き抜いてゆく自信のある「現在のグローバルな環境」とは何だろうか。この問いには、イヌイトの歴史を振り返り、「かつての極北の環境」と「現在のグローバルな環境」の違いを明瞭にすることで答えることができる。

これまでの極北人類学の成果によって [cf WENZEL 1991]、これまでにイヌイトは急激で根底的な文化の変化を二度経験してきたことが明らかにされている。その一つは、先に触れた500年前の小氷期というグローバルな環境変動による変化であり、もう一つは、1960年代の定住化に伴う変化である。

前者では、極北圏の寒冷化に伴う海水の進出によって海が閉ざされ、それまでの主要な生活資源であったホッキョククジラをはじめとする大型海棲哺乳類がイヌイトの居住域に到達することがなくなった結果、大規模な集落での定住生活が難しくなり、アザラシやセイウチなどの中小型海棲哺乳類や魚類、カリブーなどの陸棲哺乳類を生活資源として、小規模な集団で季節周期的な移動生活を送るようになった [岸上 1998; MCGHEE 1978; WENZEL 1991]。現在、広く知られる典型的に「イヌイトらしい」生活様式は、この時代以後のものである。

他方、この小氷期による変化に匹敵するもう一つの大きな変化、定住化以後の文化の変化は、カナダ連邦政府が第二次世界大戦後にすすめたイヌイトの国民化政策に伴って生じた。この国民化政策によってイヌイトは連邦政府が定めた行政村落に定住化するようにされ、学校教育、医療・福祉サービス、行政サービスなど

を通してカナダという近代国民国家に編入された。その過程で、生業の機械化、航空機や貨物輸送船を通じた物品の流入、ラジオやテレビを通じたカナダ主流社会とアメリカ合衆国の消費文化の浸透がすすみ、現金経済への依存が高まっていった。また、生業の機械化がすすみ、様々な機械類の購入や維持、ガソリンや弾薬などの調達のために現金が必要になった結果、多くのハンターが賃金労働を兼業するようになっていった。こうしてイヌイトはカナダという近代国民国家に編入され、産業資本主義経済の世界システムに組み込まれてゆき、冒頭で示したように、産業資本主義経済と国民国家に従属するようになっていったのである。

したがって、今日のイヌイトが直面しているグローバルな環境の特質とは、産業資本主義経済の世界システムと国民国家から構成されていることであるということになる。つまり、冒頭のイヌイトのことばに示されている「かつての極北の環境」と「現在のグローバルな環境」は、どちらもグローバルな環境である点では共通しているが、前者は地球の気候生態環境、後者は産業資本主義経済と国民国家からなる環境という意味で異なっているのである。それでは、この産業資本主義経済と国民国家からなるグローバルな環境の特質とは何だろうか。

2 グローバルな環境の内実：国民国家＝市場＝テクノサイエンス・ネットワーク

このグローバルな環境の特質について考える上で肝要なのは、その環境を構成する産業資本主義経済と国民国家が、これまで考えられてきたように「経済」の領域と「政治」の領域に分けることができる別々の現象なのではなく、人間のみならず、非人間(モノ)も動員して拡がってゆくネットワークの一部であるということである。これは図らずもブルーノ・ラトゥール [1999, 2007, 2008] がいかにも人類学者らしい「科学者の後を追う」方法によって明らかにしてしまったことである。ここでは、このラ

トゥールの議論に基づいてグローバルな環境について整理しておく²⁾。

ラトゥール [1999, 2007] は「政治」や「経済」とは無関係であるべき実験室で働いているはずの科学者の動きにひたすら愚直について回ること、「科学」という閉じた聖域での純粋な「自然」の探求など存在せず、科学者が自然の普遍的な真理を明らかにするためには、政治家と公衆を説得し、企業に自らのアイデアを売り込んで資金を調達して回り、人間と非人間（モノ）からなる世界を動員せねばならないことを明らかにした。また、その結果として科学者が明らかにする自然の普遍的な真理も即座に応用され、新たな商品や流通手段、統治手段などのかたちで経済や政治の領域に波及する。科学者の個人的な信念がどうあれ、自然の神秘を公平無私に追求する純粋な科学など実際には存在することはできず、常に応用工学と一体化したテクノサイエンスは政治と経済と分かちがたく結びつき、それらの全体の中に埋め込まれているのである。

もちろん、テクノサイエンスが埋め込まれた「政治」と「経済」も分離しているわけではない。ラトゥール自身は「政治」と「経済」の関係について十分に論じているわけではないが、その議論を補足した川村 [2008: 301-311] が指摘しているように³⁾、近代国民国家体制が論理的な出発点として基礎を置く自律した自由な個人による社会契約という考え方は、産業資本主義経済の市場が成立しないと存在しえない。自由な自律した個人は、市場システムの拡大と普及によって、かつて中世ヨーロッパの封建制での村落共同体に埋め込まれていた個人が労働力として経済的に自立すると同時に、生活に必要なモノを共同体に依存することなく市場から確保することができるようになってはじめて生まれてくる⁴⁾。また、川村 [2008: 306-308] が指摘するように、近代国民国家の端緒となった市民革命が権力の奪取によって「市場における自由」を実現するために起きたことからわかる

ように、「自由な市場」が成立すること自体に国民国家の権力が必要であり、「経済」と「政治」は不可分な関係にある⁵⁾。

このように国民国家と産業資本制の市場とテクノサイエンスは緊密に結びついており、「政治」と「経済」と「科学」という別々の領域に分離することはできない。しかも、それだけでなく、さらにラトゥール [2008] は、こうした分割自体が近代の「文化／自然」⁶⁾ の二元論に基づいた虚構であり、実際に存在するのは、人間と非人間（モノ）で織り上げられた縫い目のない一枚の織物、人間と非人間のハイブリッドなネットワークであることを明らかにした。

「近代」という考え方においては、人間だけからなる「文化」と非人間（モノ）だけからなる「自然」に宇宙全体が分離され、普遍的な理性に基づく自由な政治的主体としての人間同士が自然とは独立に国民国家などの社会を自由に構築する実践が「政治」、文化から離脱した科学者が自然の普遍的な真理を文化からの汚染なしに明らかにする実践が「科学」とされる [ラトゥール 2008: 32-88]。また、ラトゥールは直接に論じてはないが、この区分に従えば、モノを自然から調達して社会に流通させる「経済」は、文化と自然の相互作用の場であるということになるだろう。この「近代」の考え方では、文化からの影響を排除すればそれだけ自然の普遍的な真理が開示され、モノへの欲望などの自然からの影響を排除すればそれだけ政治的主体は普遍的な理性に従って文化をより合理的かつ自由に構築することができると考えられるため、社会の自由で合理的な構築と自然の普遍的な真理の開示を保証する文化と自然の分離が普遍的な進歩として目指される [ラトゥール 2008: 32-88]。同じように、この「近代」の論理に従えば、文化と自然の相互作用である経済も、そうした進歩によって、文化を支える普遍的な理性と自然の普遍的な真理に従うようになり、より合理的なものに進歩するとされることになるだろう。

しかし、実際に人間が構築しているのは、ラトール [2008] が強調するように、人間だけからなる文化ではなく、人間と非人間（道具や機械、通信・交通網などのモノ）が動員されて組織化された人間と非人間のハイブリッドなネットワークである。このハイブリッドなネットワークの構築は、人間だけでなく、非人間も動員されるという意味で純粋に政治的な実践ではなく、政治と経済とテクノサイエンスが混合した実践であると言える。また、科学によって明らかにされる真理は、人間と非人間でハイブリッドに構築された実験室をはじめ、非人間を機械装置の助けをかりて次々と「刻印」（地図や標本や数値など、運搬可能なかたちで情報を刻み込まれたモノ）に変換しながら「計算の中心」（研究所など、ネットワークの周辺からの刻印を比較したり結合したりして計算し、真理を明らかにする場）に運ぶ長大なネットワークを通してはじめて明らかになるのであって、人間から切り離された自然の真理ではなく、人間と非人間のハイブリッドなネットワークに取り込まれた限りにおいての非人間の真理である [ラトール 1999 : 365-434, 2007 : 33-141, 2008 : 32-88]。この科学における真理の発見においても、人間と非人間のハイブリッドなネットワークの構築が前提になっており、科学の実践は政治と経済の実践に混じり合っている。つまり、「文化」と「自然」という分割はもちろん、その分割に応じた「政治」と「科学」と「経済」という異なる実践の領域があるわけではなく、人間と非人間のハイブリッドなネットワークを構築するという「政治＝テクノサイエンス＝経済」の実践があるだけなのである。

したがって、今日のイヌイトが直面しているグローバルな環境を構成しているのは、人間と非人間のハイブリッドなネットワークである国民国家と産業資本制の市場とテクノサイエンスの複合体ということになる。たしかに、そこには、議会や官公庁、工場、鉱山、証券取引所、大学、実験室、観測所などのように、国民国家

と市場とテクノサイエンスを特徴づける結節点はある。しかし、そのそれぞれが独立しているわけではなく、それぞれを構成する人間と非人間すべてがネットワーク状に相互に縦横に結ばれており、そのネットワークの一枚の織物の中に国民国家と市場とテクノサイエンスは溶け込んでいるのである。

3 国民国家＝市場＝テクノサイエンス・ネットワークの特質

それでは、この国民国家と市場とテクノサイエンスが溶け込んでいる人間と非人間のネットワークにはどのような特質があるのだろうか。川村 [2008] の議論に基づいて考えると、このネットワークには、欧米を中心にその中心以外の場所の人間と非人間を周辺化しながら無際限に延びてゆき、その周辺化された人間や非人間が欧米という中心を回るように次々に動員することによって、周辺化された人間や非人間を支配、管理、搾取するが、その支配と管理と搾取はあくまでもネットワークの内部に限定されるのであって、周辺化された場所を面的に覆うことはないという特徴があることがわかる。

このネットワークの拡張は、川村 [2008 : 301-311] の議論によれば、デカルトの心身二元論にはじまる「文化／自然」の二元論の浸透、産業資本制の市場の発生、大航海時代のフィールド科学調査の進展、実験法の発明、啓蒙思想による社会契約論など、欧米の中心で起きた出来事が複合することで進展してきた。そうした複合的な出来事が絡み合い、欧米を中心に「近代」というプロジェクトが進展してゆく中で、普遍的な理性に従う人間が自由に構築する文化が、人間から切り離された非人間が普遍的な真理に従っている自然から理念上で分離されてゆき、その「文化／自然」の二元論のもとで人間と非人間を自由に動員することができるようになった欧米が、その二元論をエンジンにネットワークを無際限に拡張してきたのである。

こうしたネットワークの拡張を支えてきたの

は次のような論理である [ラトゥール 2008 : 32-88 ; 川村 2008 : 301-311]。文化と自然が理性と真理という異なる二つの普遍的な秩序に従っているとすると、その相互作用がそれらの普遍的な秩序には影響を与えることはないということになる。この前提によって、文化の秩序の崩壊にも自然の秩序の崩壊にも怯えることなく、人間と非人間をあらゆるやり方で自由に結び付けてハイブリッドなネットワークを構築することが可能になる。しかも、そのネットワークが拡張し、より多くの人間と非人間を動員することができればそれだけ、そのネットワークによって「自然」の真理が開示され、産業資本制の市場は拡大し、人間は伝統や共同体の束縛から解放されて自由な理性的な政治主体になり、その理性によって理想的な社会が築かれることになるので、「文化／自然」の二元論は人間と非人間のハイブリッドなネットワークの拡張を加速する。文化と自然が異なる秩序に従っており、人間が身体的な欲望などの自然から分離されるほど理性的で自由な政治主体になり、科学が文化から分離されるほど自然の真理が明らかになるとする「文化／自然」の二元論は、その分離の実現のために人間と非人間のハイブリッドなネットワークを加速度的に増殖させるのである。

しかし、このネットワークはそこに接続されてゆく人間と非人間を平等に繋いでゆくわけではない [ラトゥール 1999 : 365-434, 2008 : 32-88, 160-217]。このネットワークでは、様々な場所でその末端に取り込まれた人間と非人間が、標本や地図、図表など、輸送可能で計算可能になるように画一化された刻印に変換され、計算の中心に送られて蓄積される。そして、その計算の中心で、様々な場所から送られてきた刻印が比較されたり結合されたりすることで自然の真理が発見される。さらに、このネットワークが維持されることで、カントの言う「コペルニクス的転回」が生じるようになり、ネットワークによって動員された世界の全体が

その中心を字義通り回りはじめ、その中心は周辺化された世界を遠隔操作できるようになる。しかし、そうしたコペルニクス的転回によって自然の真理を知り、世界を遠隔操作するのは、計算の中心にいる欧米の科学者であって、その末端や中間にいる人間ではない。末端や中間にいる人間と非人間はただ遠隔操作されるだけである。

また、ラトゥールが直接に論じているわけではないが、これまでにみてきたように産業資本制の市場と国民国家がテクノサイエンスと溶け込み、一つの切れ目のないネットワークになっているのならば、テクノサイエンスと同じことが市場と国民国家についても言えるだろう。このネットワークに組み込まれた産業資本制の市場がテクノサイエンスと絡み合いながら同じ原理で機能しているのならば、その拡張によって自由な政治主体になるのは、テクノサイエンスの場合の科学者と同じように、資本を投下してネットワークを拡張した欧米の資本家であって、その末端や中間に接続された人間ではないことになる。むしろ、ネットワークの末端や中間に接続された人間は伝統や共同体の束縛から解放されても、その代わりに市場に従属して搾取されるようになるだけだろう。おそらく、今日、グローバリゼーションが進展する中で南北格差が深刻になり、社会の管理化と監視化がすすんでゆくことの原因はここにある。

ただし、このネットワークによる支配と管理と搾取が絶対的なわけではない。中心と周辺の力学に基づく支配と管理と搾取はあくまでもネットワークの内部でのみ有効なのであって、そこから一歩でも出てしまえば、何の効果もなくなってしまう [ラトゥール 1999 : 197-205, 2008 : 417-434]。このことは、このネットワークの典型的な一部である NORAD（北米航空宇宙防衛司令部）を例に考えれば、すぐにわかる。NORAD は、そのネットワークに繋がれている全地球のミサイル・サイト、戦略爆撃機、戦闘機、迎撃ミサイル、監視衛星、攻撃衛星、

ポラリス原潜、空母機動部隊のすべてを自由に遠隔操作でき、その命令は絶対だが、ポラリス原潜のそばでアザラシを獲っているイヌイトを遠隔操作することはできないし、命令しても鼻で笑われるのがおちだろう。つまり、このネットワークの内部では、中心と周辺の力学による支配と管理と搾取は絶対的だが、その支配と管理と搾取は面的ではなく、隙間だらけなのである。

4 グローバリゼーションの真実：地球規模に拡がるハイブリッド・モンスター

したがって、現在、イヌイトが直面しているグローバルな環境とは、近代というプロジェクトがはじまって以来、自然の真理を発見して文化を自由に建設するために、欧米が自らを中心に支配と管理と搾取の網の目として拡張してきた人間と非人間のハイブリッドなネットワークによって覆われた環境であることになる。しかし、川村 [2008 : 259-268] が指摘するように、もう一つ、このネットワークのグローバルな拡張に伴って、その副産物としてグローバル化したものを見逃してはならない。それは、このネットワークの拡張の過程で人間と非人間が混ぜ合わせられて生みだされ、ネットワークの支配と管理から溢れだして制御不可能になったハイブリッド・モンスターである。

先にみたように、近代の「文化／自然」の二元論はこのネットワークの拡張を加速するエンジンになってきたが、その前提には、文化と自然が異なる秩序に従っており、人間と非人間を混ぜ合わせても、それらの秩序が変わってしまうことはないという認識があった。この前提があるために、近代のプロジェクトを押し進める欧米の中心は人間と非人間を自由自在に組み合わせることができるようになったが、その反面、どんな人間と非人間の組み合わせも文化と自然に影響を与えることはないという安心感から、その混合が人間と非人間に引きおこす影響に対して無頓着にもなっていた。「文化／自

然」の二元論の両極で、人間を代弁＝表象する政治家は人間だけの社会を自由に構築することばかりを考え、非人間を代弁＝表象する科学者は非人間の自然の真理を明らかにすることばかりを考えてきた結果、その両極で文化の自由な構築と自然の真理の解明さえ実現されるのであれば、どのように人間と非人間を組み合わせるハイブリッドなネットワークを生みだしてもよいことになってしまったからである [ラトゥール 2008 : 32-88]。

その結果、前節で見たように、欧米という中心での文化の自由な建設と自然の真理の探究に資すれば何でもよいというかたちで、このネットワークは中心以外の場所の人間と非人間をのべつまくなしに周辺化しながら増殖して拡張するようになっていった。しかも、実際にはハイブリッドなネットワークを構築して拡張しているにもかかわらず、政治家は人間の社会の構築だけに責任をもち、科学者は非人間だけの自然の真理を明らかにすることに責任をもつだけなので、実際に構築されて拡張されるネットワークには誰も責任をもたないことになってしまう。さらに加えて、このネットワークは人間と非人間のハイブリッドであるため、人間とも非人間ともつかない特性をもっており、その構築と拡張に責任をもって対処しようとしても、人間のことばかり考える政治家にも、非人間のことばかり考える科学者にも、自らが構築したものであるにもかかわらず、不可解で制御不可能なものとして立ち現れることになってしまう [ラトゥール 2008 : 32-88]。こうして、このネットワークは、たとえば今日の市場の振る舞いのように、誰が責任をもつこともない不可解で制御不可能なモンスターとして暴走することになってしまったわけである。

さらに、このネットワークは人間と非人間を混合する過程で、商品や機械装置、流通や統治のネットワークなど、様々な人間と非人間のハイブリッドなキメラを続々と生産してゆくが、そのキメラを生産するネットワークが不可解で

制御不可能なため、そのキメラも同じように不可解で制御不可能なモンスターになってしまう[川村 2008:259-268]。ラトゥールと川村は直接に論じていないが、そうした生産物の中でも、とくにダイオキシンやPCB、DDT、フロン、CO₂のような産業廃棄物や副産物というモンスターは大きな問題を引きおこしている。今日、よく知られているように、そうした産業廃棄物や副産物は、これらを生産したネットワークから漏れだしてその外部へ拡散し、その生産者たちの意図や予測を超える影響をグローバルな規模の環境に与えつつあり、それらを生産したネットワークが点と線からなる隙間だらけのネットワークであるのとは対照的に、その隙間を埋めるように面的に拡がっているのである。

したがって、今日のイヌイトが直面しているグローバルな環境とは、欧米という中心がそれ以外の場所の人間と非人間をのべつまくなしに周辺化しながら支配と管理と搾取をすすめてゆく国民国家=市場=テクノサイエンス・ネットワークで覆われるとともに、そのネットワークが生み出すハイブリッド・モンスターによってその隙間が満遍なく覆われている環境であるということになるだろう。

このグローバルな環境で重要なのは、このネットワークとその産物の二つが複合していることである。もし、グローバル化したのが国民国家=市場=テクノサイエンス・ネットワークだけならば、そのネットワークで全地球が覆われ、そのネットワークを通して周辺化された人間と非人間がグローバルに支配、管理、搾取されていると言っても、その支配と管理と搾取が有効なのは隙間だらけのネットワークの内部だけなので、その支配と管理と搾取に対処するのは難しくない。電話やインターネットのように、その便利な用途に合わせて自分に都合のよいときにだけ接続すればよく、接続を切ってその支配と管理と搾取から逃れることもできるだろう。しかし、ネットワークによって生み出されるハイブリッド・モンスターはそうはいかな

い。ネットワークの隙間を埋めるかのように、のべつまくなしに面的に全地球化するからである。ホッキョクグマもアザラシも、ハンバーガーは食べず、コークも飲まず、インターネットに接続もせず、デズニーランドで遊びもしないが、それでもPCBとDDTは食べてしまうのである。

Ⅲ イヌイトは何を守ろうとしているのか？：イヌイトの先住民運動の意味

1 ハイブリッド・モンスターへのイヌイトの対応

これまでに整理してきたグローバルな環境の状況が顕在化するようになったのは、川村[2008]が指摘しているように、1980年代末のことである。冷戦が終結し、「壁」が崩壊するに伴って、人間と非人間の流れが制御不可能になり、市場が暴走をはじめ南北格差が深刻になるとともに、地球環境問題と人口問題と貧困問題が表面化し、AIDSをはじめとする様々な新たな奇病など、撲滅したはずのパンデミックがかつてない規模で復活した。グローバルに張り巡らされた国民国家=市場=テクノサイエンス・ネットワークの制御不可能な特性が顕在化するとともに、その支配と管理と搾取の暴力的な特性があからさまになり、そのネットワークの隙間を埋めるようにその副産物の汚染物質が面的にグローバル化して環境問題を引きおこしていることが明らかになったのである。

もちろん、こうした複合的なグローバリゼーションの波はイヌイトにも襲いかかっている。早くは16世紀からイヌイトは欧米の探検隊や捕鯨船団の断続的な接触を受けはじめ、20世紀に入って毛皮交易に参入するに伴って国民国家=市場=テクノサイエンス・ネットワークに徐々に接続されるようになってゆき、1960年代の定住化以後には本格的に取り込まれるようになっていった。

定住化以前には、イヌイトがこのネットワー

クに接続するのは、銃や弾薬、小麦粉、タバコ、お茶、コーヒーなど、自分たちが必要とするものを手に入れるときだけであり、接続するかどうかを選択することができた。この時代にイヌイトとの毛皮取引に従事したハドソン湾会社の毛皮交易所員は、イヌイトが毛皮取引にあまり依存するようにならなかったため、この時代の末期になっても依然として、イヌイトが「ハドソン湾会社のために働く人間」(Hudson's Bay men) になってくれるように望みつづけていたという [WENZEL 1991: 106-109]。イヌイトは「コーヒーやビスケットが欲しくなるまではアザラシだけの生活で満足し、そうしたものが欲しくなったときにだけ、パンゲネグトウング (の交易所) に行くために罫猟を行った」 [GOLDRING 1986: 171; WENZEL 1991: 108より引用] のであり、「アザラシとクジラをさかんに獲ったが、罫猟をあまりしなかった」 [GOLDRING 1986: 171; WENZEL 1991: 109より引用]。また、カナダ連邦警察の犬橇警察隊や人類学者や自然科学者がイヌイトを訪れることがあっても、その訪問はあくまで散発的な出来事にすぎなかった。

ところが、定住化するようになると状況は逆転してしまう。それ以前は、季節周期的な移動生活の中で、食べものなどの生活資源の必要に応じて野生生物と接触するのとちょうど同じように、必要に応じて国民国家=市場=テクノサイエンス・ネットワークに接続するだけだったという意味で、極北圏に点在するネットワークの端末はイヌイトの季節移動生活のパターンに取り込まれていたと言える。しかし、官公庁や企業や生協組織などを通してネットワークに常時接続された行政村落で生活するようになった定住化以後は、逆にイヌイトの生活のパターンがネットワークに取り込まれるようになってゆく。定住化以後にすすんだ生活時間の変化に端的にあらわれているように [岸上 1993]、狩猟・漁労などの生業活動の合間など、自らの生態的な時間の都合に合わせてネットワークに接続す

るのではなく、学校や行政組織や商業施設などが従っているネットワークの時間に自分たちの生活を合わせねばならなくなる。こうして平日は賃金労働を行い、ウィークエンドやパケーションに生業を行う兼業が増えてゆき、生業の合間に自分の都合に合わせてネットワークに接続するのではなく、自らが常時接続されているネットワークの都合に合わせて生業を断続的に行わねばならなくなるとゆき、以後、本稿の冒頭に示したように、ネットワークに依存する生活に急速に移行していったのである。

こうした状況が進展するに伴ってイヌイトは危機感を募らせてゆく。たしかに、ネットワークへの常時の接続によって生活が豊かになったという実感があり、ネットワークとの接続を切って定住化以前の生活に戻るつもりはなかったものの [大村 1998]、その代償にネットワークに取り込まれて同化されてしまうことへの危機感が大きくなってゆく。先住民運動のリーダーの一人で「ヌナウトの父」とも呼ばれるジョン・アマゴアリク (John Amagoalik) が当時を振り返って語った次のことばには、こうした危機感が示されている。

「同じように私の心をかき乱したのは、イヌイトではない人々が北極の未来とイヌイトの未来について論じあう会話を耳にすることだった。彼らの間では、イヌイトは民族として生き残ることはできないだろうという点で常に意見が一致していた。彼らが皆、同意していたのは、イヌイトの文化と言語は〈消え去るだろう〉、そして、それらはただ記憶の中にだけ残り、博物館の棚に陳列されるだけだろうということだった。私の心をさらに一層かき乱したのは、〈イヌイトの文化の死〉について語るとき、彼らがあまりにも何気ないということだった。」 [AMAGOALIK 2000: 138]

このことばにあるように、1970年代には、イヌイトが国民国家=市場=テクノサイエンス・ネットワークに完全に取り込まれて同化、吸収

され、その末端に繋げられた近代的な個人として自らのことばも生活様式も失うことが、カナダでは当然視されていた。

さらに、1970～80年代になると、科学者の調査によって、PCBやDDT、重金属類、放射能核種など、このネットワークによって産出されて漏れだした汚染物質が極北圏を汚染しつつあることが確認され、それらの汚染物質が極北の生態系とイヌイトに与える影響について警告が発せられるようになった〔岸上 2002, 2005〕。これらの汚染物質は、北半球の中低緯度地帯で使用されて廃棄された農薬や産業廃棄物が大気循環によって極北圏に運びこまれ、ユーラシア大陸とアメリカ大陸とグリーンランドで囲まれた内海である北極海に徐々に堆積し、食物連鎖の上位にある生物に濃縮されたかたちで蓄積される〔AMAP 1997; JENSEN, ADARE & SHEARER 1997; 岸上 2002〕。1990年代に行われた野生生物の調査とイヌイトの健康調査によって、これらの汚染物質がイヌイトだけでなく、アザラシやホッキョクグマからも高濃度で検出され、生態系とイヌイトに与える深刻な影響が懸念されるようになった〔岸上 2002〕。また、極北圏でもオゾンホールが確認され、CO₂が原因であるとされる地球の温暖化によって極北の生態系とイヌイトの生活が実際に影響を受けはじめるようになってゆく〔岸上 2002; KRUPNIK & JOLLY 2002〕。このように、1980年代以後、ネットワークが産出したハイブリッド・モンスターが、恐怖の大王さながらイヌイトの頭上に舞い降りつつあることが判明したのである。

こうした状況に対してイヌイトが展開してきたのが、定住化以後にはじまる先住民運動である。このイヌイトの先住民運動では、イヌイトの生活圏の土地に対する土地権、その土地で狩猟・漁労・罨猟・採集などの生業を行う生業権、自らの言語を話す言語権、自らの子供を自ら教育する教育権などの束である先住民権を取り戻すために、カナダ連邦政府や州政府を相手に政治交渉がすすめられた。こうした交

渉は、1975年の「ジェームズ湾および北ケベック協定」や1992年の「ヌナヴト協定」など、カナダ連邦政府や州政府との政治協定に実を結んでいった。また、こうしたイヌイトの先住民運動の母胎となったカナダ・イヌイト協会 (Inuit Tapirit Kanatami) やイヌイト環極北会議 (Inuit Circumpolar Conference) をはじめ、イヌイトの権益を代表する団体は、ほとんどの発生源が極北圏の外部にある環境汚染に対応するために、1990年代以後、カナダ内外で活発な活動を展開してきた〔岸上 2002, 2005〕。とくにカナダ環極北会議は NGO として国連の社会経済理事会 (Economic and Social Council) の正式なオブザーバーとなり、極北圏の環境問題を引きおこしている残留性有機汚染物質に関する条約締結などのために活発なロビー活動を行ってきた〔岸上 2002〕。

こうした先住民運動の経緯から明らかなのは、イヌイトが国民国家＝市場＝テクノサイエンス・ネットワークとの接続を断ち切ってしまうとしているわけではなく、むしろ、そのネットワークを逆に利用することによって、ネットワークに部分的に取り込まれることを甘受しつつ、完全に同化されることなく、自らの言語や文化などの生き方を守ろうとしていることである。政治協定を通して先住民権を取り戻すにも、国際機関に働きかけるにも、国民国家＝市場＝テクノサイエンス・ネットワークに接続する必要がある、それどころか、そのネットワークがなければ、極北圏の遙か彼方の外側からやってくるハイブリッド・モンスターに対処すること自体が不可能である。しかし、そのネットワークに完全に同化されて吸収されてしまっただけでは意味がない。だからこそ、土地権や生業権、言語権、教育権などの先住民権を奪回し、ネットワークの周辺に取り込まれて搾取される近代的な個人ではなく、「イヌイト」でありつづける必要があったわけである。この意味で、このネットワークに取り込まれつつも、イヌイトが先住民運動を通して守ろうとしている

のは、「イヌイト」でありつづけることであったと言えるだろう。

それでは、イヌイトが守ろうとしている「イヌイトでありつづける」こととは、どのようなことなのだろうか。

2 「大地」との絆：イヌイトの自信を支える オートポイエーシスな人間と非人間のネットワーク

イヌイトの先住民運動で強調されたことに、「大地との絆」と呼ぶことができるイヌイトと「大地」(*nuna*)の一体的な関係がある[大村2009a]。次のイヌイトのことばにあるように、大地とは、人間と野生生物を含む極北の生態系の全体のことであり、イヌイトであるということは、この大地との絆の中で生きるということの意味している。

「大地は冷たく、広大である。それは荒野だ。容赦がない。無慈悲でさえある。しかし、大地は憩いの場でもある。生命を育み、息づいている。血を流すことすらある。それは我々の母なる大地の一部である。それは美しい。それは私たちの文化を育む。私たちはその一部であり、それは私たちの一部である。我々是一つなのだ。」(「ヌナヴトの父」と呼ばれるアマゴアリクのことば[AMAGOALIK 2001:9])

ここで注意しなければならないのは、こうした大地との絆は抽象的な観念ではなく、次のイヌイトのことばにあるように、狩猟・漁労・罨猟・採集からなる生業の実践を通して築かれる現実の関係であるということである。

「生業は一般的な意味での職業ではない。生業は生き方なのだ。生き方としての生業には、ハンターの指針となる具体的なルールとしきたりがある。そのような不文律が、環境との相関関係はどうであるべきかを教えてくれる。大地との関係を断ち切ってはならないように私たちは教えられ

ている。イヌイトは自然摂理の一部にすぎないということを常に意識している。尊厳、敬意、そして相互の利害関係を守ることが行動の指針であり、環境的な倫理である。」(当時イヌイト野生生物協会連合の幹部で、ヌナヴト準州の初代総監になったエグネックのことば[ERNERK 1989:23; WENZEL 1991:157より引用])

つまり、イヌイトであるということは、生業の実践を通して極北の生態環境との一体的な関係を大地との絆として維持しているということなのである。それでは、この生業の実践を通して維持される大地との絆とは、どのようなことなのだろうか。

すでに別稿[大村2008, 2009a, 2009b]で明らかにしたように、大地との絆とは、極北の環境に生きる様々な種の野生生物たちが織りなすネットワークにイヌイトが生業の絶え間ない実践を通して参加しながら、自らの文化を紡いでゆくことを指している。その大地との絆では、次のような過程で、様々な種の野生生物との生態的な関係とイヌイト同士の社会的な関係が不断に更新され、様々な野生生物が結び結ぶ生態的な関係の結節点の一つとしてイヌイトの社会集団が生成される。

まず、イヌイトが狩猟などの生業技術によって、野生生物の個体と「食べものの贈り手/受け手」という生態的な関係に入ると同時に、その結果として手に入れた食べものなどの生活資源をイヌイトの間で分かち合うことで、イヌイト同士の社会関係が生成される。そして、そうした生活資源の分かち合いによって生じた社会的な関係を通してイヌイト同士の協働が生じ、その協働を通してイヌイトの間に生業技術が分かち合われるようになる。さらに、その生業技術の分かち合いを通して蓄積されて錬磨される生業技術によって、「食べものの贈り手/受け手」という野生生物との生態的な関係が新たな個体との間により効率的に再生産されることになる。つまり、この大地との絆では、イヌイト

という人間と野生生物という非人間が生業の実践によって結び付けられ、自然=文化として一体化された人間と非人間のハイブリッドな複合体である大地が生成されるのである。

もちろん、こうした循環的な過程で生成されて更新されてゆく野生生物との生態的な関係は、一種の野生生物に限られるわけではなく、様々な野生生物種との間に結ばれる。したがって、イヌイトの社会集団は、そうした複数の野生生物種と循環的に更新される諸関係の結節点に生成することになる。また、そうしてイヌイトと関係を結ぶ野生生物種同士も無関係なわけではなく、相互に生態的な関係を結び合い、そうして結ばれる生態的な諸関係のネットワークの結節点として、それぞれの群れを生成している。したがって、イヌイトの社会集団は、様々な野生生物の群れの結節点が無数に相互連結したネットワークの中に、その結節点の一つとして溶け込みつつ浮かび上がるように生成することになる。つまり、大地との絆とは、大地という様々な野生生物のネットワークに、イヌイトの社会集団が生業の実践を通してその結節点の一つとして組み込まれることなのである。

こうした大地との絆に特徴的なのは、その絆によって生成するイヌイトという人間と野生生物という非人間のハイブリッドな複合体が、マトゥラーナとヴァレラ [1991] の言うオートポイエーシスなシステムになっており、生業が循環的に実践される限りにおいて自律的に閉じつつ外部に開いた系になっている点である。この大地との絆では、それぞれの野生生物種との生態的な関係とイヌイトの社会的な関係は循環的に閉じた系になっており、その閉じた系の中で、食べものをはじめとする生活資源の獲得から社会関係の調整にいたるまでの政治・経済のすべて、つまり生活のすべてが自律的に賄えるようになっている。同時に、このシステムは、野生生物との生態的な関係とイヌイト同士の社会関係が循環的に生成するならば、外部から何でも取り入れつつ自らを持続的に維持する

ことができる。このことは、数々の極北人類学者が指摘してきたように [e.g., FIENUP-RIORDAN 1983; 岸上 1996; NUTTAL 1992; スチュアート 1992, 1995; WENZEL 1991]、スノーモービルなどの機械類が導入されたり、ハンバーガーなどの加工食品が食べられるようになったりしても、生業の循環が途絶えることがなかったために、様々な文化の変化を経てもなおイヌイト社会の継続性が保たれてきたことに示されている。

このように大地との絆がどのようなものかわかれば、イヌイトの自信が何に基づいており、イヌイトが先住民運動で何を守ろうとしているのかが明らかになるだろう。

たとえ国民国家=市場=テクノサイエンス・ネットワークに取り込まれ、その中でどんなに周辺化され、支配、管理、搾取されていようとも、そのネットワークとは自律的に作動する大地との絆さえ維持されていれば、そうした支配と管理と搾取のネットワークからいつでも離脱し、自律的に作動する大地との絆の系の中で生活のすべてを賄うことができる。イヌイトにはもう一つの選択肢として大地との絆に基づく生き方が確保されており、いよいよとなれば、国民国家=市場=テクノサイエンス・ネットワークとの接続を切ってもイヌイトは生きてゆくことができるのである。冒頭に挙げた二つ目のイヌイトのことばにあるように、国民国家=市場=テクノサイエンス・ネットワークの外に出てしまえば、イヌイトはそのネットワークの主の白人 (*qapluñaat*) に屈服しているわけではなく、大地と一体化した「イヌイト」として自律しているのである。

しかし、逆に言えば、その大地との絆によって生活を保障してくれる大地それ自体が国民国家=市場=テクノサイエンス・ネットワークの撒き散らしたハイブリッド・モンスターによって破壊されたり、大地との絆を絶え間なく更新するための生業活動が規制されてしまったり、生業技術の共有に必要なイヌイト語が消え去っ

てしまったり、生業技術を子どもたちに伝える場が失われてしまえば、大地との絆というもう一つの選択肢も消え去り、後はただネットワークに取り込まれ、支配され管理され搾取されるしかなくなってしまう。だからこそ、イヌイトは国民国家=市場=テクノサイエンス・ネットワークに働きかけることで先住民権を奪回し、ハイブリッド・モンスターの跋扈を止めるために努力するのである。イヌイトが先住民運動で守ろうとしたのは、国民国家=市場=テクノサイエンス・ネットワークからいつでも離脱し、近代的な個人として支配され管理され搾取されることをいつでも拒否することができる前提条件を確保しながら、大地との絆によって自律して生きる「イヌイト」でありつづけることだったわけである⁷⁾。

IV 「自然=文化相対主義」に向けて：人類学の役割とその可能性

こうしたイヌイトの自信とその自信の源である大地との絆を守るための闘いから、私たちは今日のグローバルな環境で生き延びるための指針をいくつか教えられる。

まず一つには、自らの生活を自律的に維持するオートポイエーシスなシステムを維持しつづけていれば、国民国家=市場=テクノサイエンス・ネットワークの中で支配と管理と搾取を受けつつも、そのネットワークに完全に取り込まれることなく、そのネットワークと交渉することができるということである。ネットワークに取り込まれた近代的な個人であると同時に、もう一つの選択肢であるオートポイエーシスなシステムで生きる人間、たとえばイヌイトの場合は「イヌイト」でもありつづけるという意味で二重の人格をもつことで、そのネットワークの奴隷にならずにすむのである。

この意味で、湖中 [2006] の二重経済論に基づいて小田 [2009] が提案する二重社会は正鵠を得ている。ただし、その二重社会において重

要なのは、国民国家=市場=テクノサイエンス・ネットワークとは別のもう一つの選択肢が、イヌイトの大地との絆のように、そのネットワークから自律して作動するオートポイエーシスなシステムとして、生活資源の調達から社会関係の調整にいたる政治・経済の全般にわたって自律的な生活を保障していなければならないことである。これは、ハンバーガーのグローカリゼーションのようにネットワークの内部でバリエーションが増えることとも、国民国家の福祉政策によってセーフティ・ネットを整備することとも異なることである。それらはあくまでもネットワークの内部でのことにすぎない。必要なのは、ネットワークとは自律して作動するオートポイエーシスなシステムによって、ネットワークに依存しない生活が可能であることなのである。

さらに二つ目として、こうした自律的なオートポイエーシスなシステムを守るためのイヌイトの闘いから、もう一つ重要なことを教えられる。それは、現在のグローバルな環境にあっては、欧米という中心による支配と管理と搾取を逃れるために国民国家=市場=テクノサイエンス・ネットワークとの接続を切ってしまうことは、逆に自らがそのネットワークに取り込まれることを加速してしまうことになりかねないということである。このネットワークが撒き散らしているハイブリッド・モンスターがネットワークの隙間を埋めるように面的に全地球を制圧しつつあるからである。自律した生活を保障するオートポイエーシスなシステムがハイブリッド・モンスターによって破壊されてしまえば、そのネットワークに取り込まれる以外に選択肢がなくなってしまう。そのような帰結を避けるためには、イヌイトが行っているように、そのネットワークに接続してその中心に働きかけ、ハイブリッド・モンスターの氾濫を押さえねばならない。

実際、国民国家=市場=テクノサイエンス・ネットワークが欧米の中心による世界の支配と

管理と搾取のためのネットワークであることに疑いはないとはいえ、そのネットワークに接続することで様々な利便が手に入ることもたしかなことである。このネットワークは飛行機を飛ばし、様々な便利な機械を生み出し、グローバルな規模で人間と非人間を結び付けて、その交流を促進してきた。イヌイトが国際機関でロビー活動を行うことができるのも、このネットワークのおかげである。しかし、このネットワークは「文化／自然」の二元論をエンジンに無制限に暴走しながら、無数のハイブリッド・モンスターを撒き散らすことで、グローバルな環境問題を引きおこし、ネットワークの外側にあるオートポイエーシスなシステムに脅威を与えている。

したがって、現在のグローバルな環境において重要なのは、国民国家＝市場＝テクノサイエンス・ネットワークが一元的に展開するのではなく、たとえばイヌイトの大地との絆のように、ネットワークの外側にあるオートポイエーシスなシステムがネットワークと共存することができるようにすることである。理想的に言えば、ネットワークに接続されているすべての人間が、それぞれにそれぞれの自律的な生活を保障するオートポイエーシスなシステムを保持し、近代的な個人としての生活とは別のもう一つの生活を二重に送ることができれば、ネットワークの利便性を活かしつつ、ネットワークの奴隷にならずにすむことだろう。

このときに重要なのは、国民国家＝市場＝テクノサイエンス・ネットワークも、その外部で自律的に作動するオートポイエーシスなシステムも、「文化」でも「自然」でもない人間と非人間のハイブリッドな複合体であることをしっかりと認識することである。これがイヌイトの闘いから教えられる三つ目のことである。国民国家＝市場＝テクノサイエンス・ネットワークは長大なネットワークでグローバルに展開する一方で、イヌイトの大地との絆のようなオートポイエーシスなシステムは一つの系に閉じて

しまうが、どちらも人間と非人間を結び付けた「自然＝文化」として生成されている。したがって、国民国家＝市場＝テクノサイエンス・ネットワークとオートポイエーシスなシステムの共存のあり方を探るということは、一つの「自然」の上に様々な「文化」が共存する可能性を探るということではなく、人間と非人間が「文化＝自然」として結び付けられた複合体が共存する可能性を探るということになる。

この意味で、今日のグローバルな環境で必要とされるのは、ラトゥール [ラトゥール 2008; LATOUR 2002, 2004] が主張しているように、一つの「自然」の上に多様な「文化」が構築されるとする「文化相対主義」ではなく、人間と非人間が繋がれて生成される人間と非人間の複合体としての「自然＝文化」が多様であるとする「自然＝文化相対主義」であると言えるだろう。そうした自然＝文化相対主義に基づいて、自然＝文化の複合体の一つとして国民国家＝市場＝テクノサイエンス・ネットワークをとらえ、イヌイトの大地との絆のように、それ以外にどのような自然＝文化の複合体がありうるのか、そして、それら様々な自然＝文化の複合体の共存が可能であるためには、どのような条件が必要なのかを考える必要があるのである⁸⁾。

おそらく、こうした「自然＝文化相対主義」に基づいて多様な自然＝文化の複合体の共存の可能性について考えてゆくにあたって、人類学は重要な役割を果たすだろう。ラトゥール [2008] が指摘しているように、人類学者は、たとえ様々な理論的な立場ごとの違いはあれ、また、論文を書くときには「自然」と「文化」を分けることもあるとはいえ、フィールドワークの現場では「自然＝文化」の全体を扱ってきたからである。もちろん、その際には、これまで人類学者が提唱してきた「たった一つの自然とたくさんの文化」という「文化相対主義」を深化させ、「人間と非人間のハイブリッドな複合体の多様性」という「自然＝文化相対主義」

の立場に立たねばならない。そして、その新たに深化された自然=文化相対主義に基づいて、様々な自然=文化の複合体が共存する可能性を探りながら、国民国家=市場=テクノサイエンス・ネットワークの利便を活かしつつ、その奴隷となり果てないための二重自然=文化複合体が成立するための条件を探るという役割が課されることだろう。今日のグローバルな環境において、人類学にはかくも重い任務が課されているのである。

注

- 1) 本稿では、「社会・文化」とすると記述が煩雑になるので、「文化」を「社会」も含めた生活様式全般という広い意味で使い、文化の中でも社会組織や社会制度について指す場合にのみ、社会を文化の下位概念として使うことにする。
- 2) この一連のラトゥールの議論では、考察が不十分な部分があるものの（注3参照）、1980年代の科学技術研究の成果に基づいて、現在のグローバリゼーションという現象を可能にしているテクノサイエンスの実践を核に、社会、文化、政治、経済に分けることができないグローバリゼーションの物質的側面と非物質的側面の全体が束ねられている様子が浮き彫りにされているのみならず〔ラトゥール 1999, 2007〕、そのグローバリゼーションを駆動している「近代」の論理について、他の文化の論理との比較を考慮に入れた理論的な考察が行われている〔ラトゥール 2008〕。このラトゥールの議論は、現在のグローバルな環境の特質であるテクノサイエンスを基軸にグローバリゼーションを全体論的に俯瞰したおそらく唯一の議論であるとともに、検討の対象が欧米に限定されがちな科学技術研究にあって、テクノサイエンスとは異なる実践との比較を念頭においたおそらく唯一の議論であり、テクノサイエンスの実践を基軸に展開してきた「近代」のグローバリゼーションを相対化する可能性を秘めている。イヌイトが直面しているグローバルな環境の特質について、本稿がラトゥールの議論に基づいてスケッチを試みているのは、そのためである。
- 3) ラトゥールの議論では、その焦点はテクノサイエンスにあり、国民国家と市場については正面から検討されていないため、それらのメカニズムについての議論は十分ではない。川村〔2008〕は、その国民国家と市場のメカニズムについてラトゥールの議論に忠実に沿った補足を行っている。
- 4) そもそも、マルクスやモースの議論に基づいて今村[e.g., 2000, 2007]が指摘してきたように、労働力と生産手段を切り離す産業資本制の展開に伴って、今村が「人格的所有」と呼ぶ「共同体=モノ」の一体化が解体され、人間が共同体から切り離されなければ、ルソーやホブズが社会契約の論理的な出発点とする孤立した個人などありえない。
- 5) グローバリゼーションという現象を支えているテクノサイエンスについての考察が不十分であるとはいえ、ネグリとハート〔2005〕は市場と国民国家の密接な関係についてダボス会議を例に「いかなる経済市場も政治的秩序や規制なしに存在することはできない」（ネグリ、ハート 2005: 274）ことを指摘し、今日においても産業資本制の市場は国民国家の権力によって支えられていることを明らかにしている。
- 6) ラトゥールは「自然」に対して「社会」と「文化」の両方を使っており、社会は社会組織や社会制度を、文化は観念体系を指している。文化を社会も含む生活様式全般という意味で使っている本稿では、ラトゥールの社会と文化の両方を合わせて文化と呼んでいる。
- 7) もちろん、イヌイトは大地との絆を守ろうとしているのであって、今後も守ってゆけるかどうかはわからない。その危機感が強いからこそ、現在、イヌイトは別稿〔大村 2009a〕で紹介したような様々な試みを展開している。本稿の冒頭で示したイヌイトの自信が単なる心意気に終わるか否かは、そうしたイヌイトの試みの成否によるだろう。その成否の可能性を含め、ここで示した自律と依存の共存の可能性について、今後も追跡してゆかねばならない。もちろん、本文でも指摘したように、イヌイトは国民国家=市場=テクノサイエンス・ネットワークに接続した今日の生活を評価して享受しており、か

つての生活に戻るつもりはないどころか、高度消費社会にどっぷりと漬かっているとんでも過言ではない。また、若者たちの一部に生業ばなれの現象も見られる。しかし、現在でも生業のために必要な技術は依然として確実に継承されており、たとえ国民国家＝市場＝テクノサイエンス・ネットワークとの接続が切れても、その接続以前の生業を実施することは可能であると考えられる。ただし、イヌイトの間でもしばしば話題にのぼる人口規模の問題は別である。私が知る過去20年に限っても、近代医療の導入によってイヌイトの人口は倍増しており、その人口規模をかつての生業技術だけで支えられるかどうかは疑問である。

- 8) この自然＝文化相対主義は、地球環境問題に対して重要な視点の変更を求めることになるだろう。この視点では、地球という一つの自然に対して様々な文化がそれぞれのやり方で相互作用しているわけではなく、多様な自然＝文化が全地球規模で相互に影響を与え合っているということになる。したがって、地球環境問題は、人間が地球という一つの環境を守ったり管理したりすることではなく、地球規模で存在する多様な自然＝文化が相互に共存し合うことができるように調整し合うということになり、「たった一つの地球を守れ」というかけ声のもとに一つの自然＝文化が別の自然＝文化を抑圧することはできなくなる。たった一つの地球環境という発想に立っている場合、ラトゥール [LATOUR 2002, 2004] が指摘するように、地球環境問題への対処は、その地球環境についての真理を知ると称するテクノサイエンスの専制に陥りやすいが、自然＝文化相対主義の視点はそうした専制を予防してくれるだろう。

参照文献

- AMAGOALIK, Jose
2000 Wasteland of Nobodies. In *Nunavut: Inuit Regain Control of Their Lands and Their Lives*. J. DAHL, J. HICKS and P. JULL (eds.), pp.138-141. IWGIA.
2001 What is This Land? In *The Voices of the Natives*. H-L. BLOHM (ed.), pp.9-10. Penumbra Press.
- AMAP (Arctic Monitoring and Assessments Program)
1997 *Arctic Pollution Issues: A State of the Arctic Environment Report*. AMAP.
- BRODY, Hugh
1976 Land Occupancy: Inuit Perceptions. In *Report: Inuit Land Use and Occupancy Project Vol. 1*. M. M. R. FREEMAN (ed.), pp.185-242. Department of Indian and Northern Affairs.
- ERNERK, Peter
1989 Presentation in the session 'Environmental Ethics and Wildlife Harvesting'. In *A Question of Rights: Northern Wildlife Management and the Anti-Harvest Movement*. R. KEITH and A. SAUNDERS (eds.), pp.22-25. Canadian Arctic Resources Committee.
- FIENUP-RIORDAN, Ann
1983 *The Nelson Island Eskimo*. Alaska Pacific University Press.
- GN (Government of Nunavut)
1999 *Report from the September Inuit Qaujimagajutqangit Workshop*. CLEY.
- GOLDRING, Philip
1986 Inuit Economic Responses to Euro-American Contacts: Southeast Baffin Island, 1924-1940. *Historical Papers / Communications Historiques*. pp.146-172.
- JENSEN, J., K. ADARE and R. SHEARER
1997 *Canadian Arctic Contaminants Assessment Report*. Department of Indian Affairs and Northern Development.
- 川村 久美子
2008 「訳者解題：普遍主義がもたらす危機」『虚構の「近代」』B. ラトゥール著、川村久美子訳、pp.255-320、新評論。
- 岸上 伸啓
1993 「生活時間を通してみるカナダ・イヌイト社会の変化について」『環極北文化の比較研究』岡田宏明（編）、pp.41-54、北海道大学文学部。
1996 「カナダ極北地域における社会変化の特質について」『採集狩猟民の現在』スチュアート ヘンリ（編）、pp.13-52、言叢社。
1998 『極北の民：カナダ・イヌイト』弘文堂。

- 2002 「カナダ極北地域における海洋資源の汚染問題」『国立民族学博物館研究報告』27(2):237-281。
- 2005 『イヌイト：〈極北の狩猟民〉のいま』中公新書。
- 湖中 真哉
2006 『牧畜二重経済の人類学：ケニア・サンプルの民族誌的研究』世界思想社。
- KRUPNIK, Igor and Dyanna JOLLY (eds.)
2002 *The Earth Is Faster Now. Arctic Research Consortium of United States.*
- 今村 仁司
2000 『交易する人間』講談社。
2007 『社会性の哲学』岩波書店。
- LATOUR, Bruno
2002 *War of the Worlds: What about Peace?* Princeton Paradigm Press.
2004 *Politics of Nature: How to Bring the Sciences into Democracy.* Harvard University Press.
- ラトゥール、ブルーノ
1999 『科学がつくられるとき：人類学的考察』川崎勝、高田紀代志訳、産業図書。
2007 『科学論の实在：パンドラの希望』川崎勝、平川秀幸訳、産業図書。
2008 『虚構の「近代」：科学人類学は警告する』川村久美子訳、新評論。
- マトゥラーナ、H.R.、F.J. ヴァレラ
1991 『オートポイエーシス：生命システムとはなにか』河本英夫訳、国文社。
- MAXWELL, Moreau S.
1985 *Prehistory of the Eastern Arctic.* Academic Press.
- MCGHEE, Robert
1978 *Canadian Arctic Prehistory.* Van Nostrand, Reinhold.
- ネグリ、アントニオ、マイケル・ハート
2005 『マルチチュード：〈帝国〉時代の戦争と民主主義』幾島幸子訳、水嶋一憲・市田良彦監修、日本放送出版協会。
- NUTTALL, Mark
1992 *Arctic Homeland.* University of Toronto Press.
- 大村 敬一
1998 「カナダ・イヌイトの日常生活における自己イメージ」『民族学研究』63(2):160-170。
2008 「かかわり合うことの悦び：カナダ・イヌイトの環境の知り方とつきあい方」『環境民俗学』山泰幸、川田牧人、古川彰(編)、pp.34-57、昭和堂。
2009a 「イヌイトは何になろうとしているのか?：カナダ・ヌナヴト準州のIQ問題にみる先住民の未来」『先住民とは誰か?』窪田幸子編、pp.155-178、世界思想社。
2009b 「集団のオントロジー：〈分かち合い〉と生業のメカニズム」『集団：人類社会の進化』河合香史(編)、pp.101-122、京大出版会。
- 小田 亮
2009 「〈二重社会〉という視点とネオリベリズム」『文化人類学』74(2):272-292。
- スチュアート、ヘンリ
1992 「定住と生業：ネツリック・イヌイトの伝統的生業活動と食生活にみる継承と変化」『第六回北方民族文化シンポジウム報告書』pp.75-87、北海道立北方民族博物館。
1995 「現代のネツリック・イヌイト社会における生業活動」『第九回北方民族文化シンポジウム報告書』pp.37-67、北海道立北方民族博物館。
- WENZEL, George
1991 *Animal Rights, Human Rights.* University of Toronto Press.

(2010年3月22日採択決定)

Toward Natural-cultural Relativism

Considering the Future of Globalization from the Standpoint of the Inuit Indigenous Movement

OMURA Keiichi

Keywords: Canadian Inuit, state-market-technoscience network, hybrid monster, subsistence, autopoiesis, natural-cultural relativism

The purpose of this paper is to examine the history and present conditions of 'globalization' from the viewpoint of the Inuit, the indigenous people living in Canadian Arctic, in order to reveal the characteristics of that historical phenomenon and consider what anthropologists should do to solve the problems raised by it. For that purpose, I will firstly elucidate the present conditions of 'globalization,' which the Inuit are confronting and struggling against today, based on the analysis of 'modernity' by Bruno LATOUR. I will then place the Inuit indigenous movement within the history and present conditions of 'globalization' in order to elucidate what it is the Inuit are protecting against the problems raised by this historical phenomenon. Furthermore, based on that consideration, I will reveal that the root cause of the problems raised by 'globalization' is the conflict between two different systems, in which human and matter are organized and woven into a network overarching the domain of 'culture' and 'nature.' After that, I will show that what we anthropologists are required to do in order to overcome the problems raised by 'globalization' is to establish a worldview based on 'natural-cultural relativism,' which aims to realize the coexistence of the natural-cultural complexes, in place of the worldview based on 'cultural relativism,' which aims to realize the coexistence of cultures on the assumption that 'nature' is universally the only one basis for cultural diversity. Finally, I will discuss the role of anthropologists in establishing the worldview based on 'natural-cultural relativism.'